

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHHAKU

2016. 7 No.89

トピックス

第109回文化財めぐり
中学生の職場体験
勾玉作りの出前講座
岡山大学生来館

資料紹介

大年寄廃止の書状 梶村 明慶

研究ノート

ある儒者の一生から見た
津山藩の人材登用 小島 徹

お知らせ

特別展のごあんない

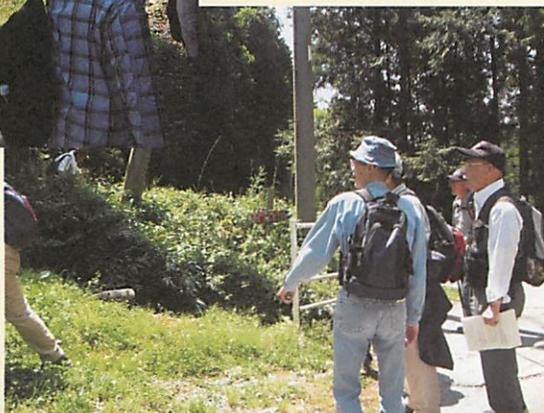
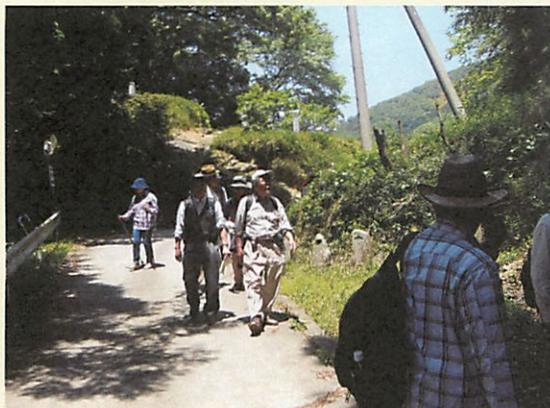


津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

(表紙写真 嵯峨山からの津山市街地眺望)

第109回文化財めぐり



5月21日に第109回文化財めぐりを開催しました。今回は津山市大篠地区を歩きました。地元の大佐々神社や善応寺、また道すがらの大日如来や五輪塔などの石造物を散策しながらめぐりました。

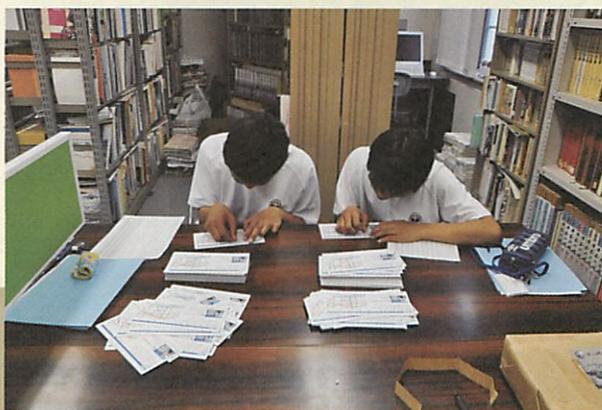
この日はよく晴れていて、季節外れに暑い一日になりましたが、初夏の一日楽しく歩くことができました。

中学生の職場体験



2人とも
がんばって
くれました。

博物館キャラクター
「ファイアー」



中学生の職場体験として、6月7日から9日までの3日間、津山東中2年生2人を受け入れました。和綴本の修復、裏張りほか、資料発送準備等々事務作業から博物館資料に直接ふれる作業まで、様々な業務を体験してもらいました。体験と同時に、歴史についての理解も深まったのではないのでしょうか。

勾玉作りの出前講座



6月16日に向陽小学校で勾玉作りの出前講座を行いました。勾玉作りは、低学年の児童でも一人で出来るため、当館の夏の学習プログラムで大人気の講座です。数年前から、向陽小学校の学年PTA活動で、勾玉作りを指導しています。今年も児童48名と保護者の方々とともに勾玉づくりチャレンジしました。滑石（かつせき）という加工しやすい石を使い、サンドペーパーで削ります。思い通りの形になったら、耐水ペーパーに水をつけてピカピカになるまで磨いて完成です。定型勾玉やしずく型、手裏剣型、ハート型などいろいろな形の勾玉ができ、紐を通してネックレスにしました。

博物館では勾玉作りの他にも、弥生土器作りやトンボ玉作り、あるいは博物館資料を利用した体験講座を実施しています。今後も学校と連携を図り、子供たちにさまざまな体験を提供していきたいと思っています。

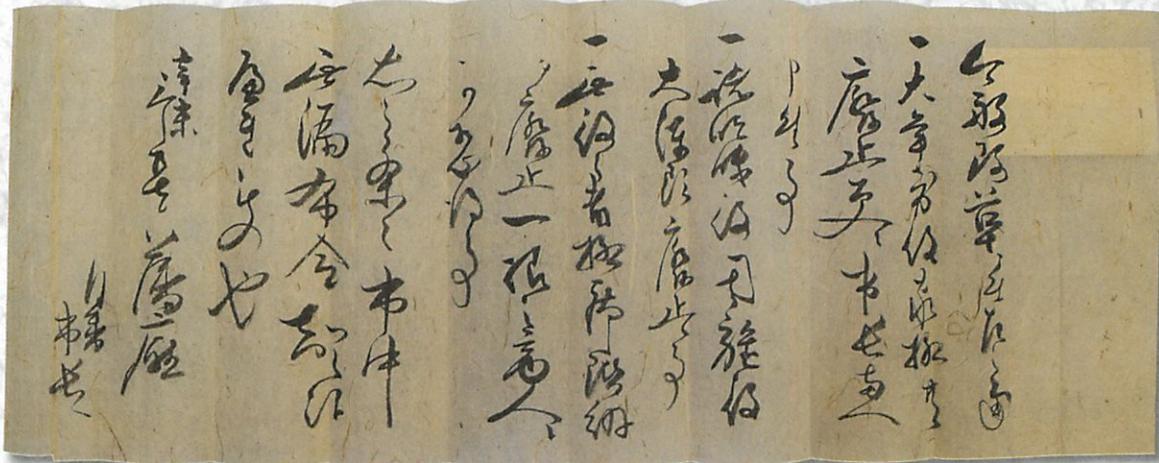
岡山大学生来館



6月18日に岡山大学日本史研究室の2回生の研修会が津山で行われ、一日目の会場として当館に25名の学生のみなさんと先生方がご来館されました。最初に当館館長の話の後、館内を見学し、その後、研修室で学生の研究発表会が行われました。

翌日はあいにくの雨模様でしたが、津山市内の史跡を見学されたとのことです。学生のみなさんに、津山に興味を持っていただければ幸いです。

大年寄廃止の書状



【書状の翻刻】

今般改革付左之通

一 大年寄役家格共

廃止更ニ市長兩人

申付候事

一 諸吟味役周旋役

大保頭廃止候事

一 無役之者格席階級

ヲ廃止一様之商人

可相心得事

右之条々市中

無漏布令知らず

へきもの也

辛未（明治四）

三月廿七日 藩庁

月番

市長へ

津山市は昭和4年（1929）に合併により津山町から津山市となり、初代市長には小沼敬三郎が就任します。実はそれ以前に「市長」と呼ばれた人物が存在しました。

それを示す一つがこの資料になります。これは江戸時代大年寄を勤めた家である玉置家に伝わった文書で、明治4年（1871）3月に当時の津山藩庁から出されたものです。これによると、改革により今までの大年寄という役職を廃止し、新たに市長に任命すると記されています。

大年寄とは町奉行の下、城下町の町政全般を担当する役職で、藩からの御触れの伝達、町奉行からの指示の執行、報告、町人間の紛争の調停などを行っていました。基本的に世襲で城下の有力町人3家が任命されました。

また、一方では同年4月に出された戸籍法により、津山藩は6月には藩内を20の区域に分け、そ

梶村 明慶

れぞれ戸長、副戸長を置き戸籍を編成することになります。この年に作られた旧城下町の戸籍を見ると、市長を務めている玉置氏と菊井氏の両名が戸長として記されているものがあります。また、玉置家に残されていた明治4年の「御布令控帳」には6月以降も「玉置市長」「菊井市長」の文字が見えることから、この両名は旧城下町の市長と戸長を兼務していたものと推測できます。

この後、廃藩置県を経て、美作国内の県は合併され、同年11月に北条県となります。そして翌5年3月、県内の区域が39区に編成され、その際、旧城下町は第一区内と第二区内に分かれることになりました。そして、市長を務めていた2名は、この第一区と第二区の戸長にそれぞれ就任します。市長という役職はこの時終わつたと思われませんが、詳細はよくわかりません。

ある儒者の一生から見た津山藩の人材登用

小島 徹

はじめに

小島清介の略歴

文化年間(1804~1818)、津山藩松平家中では領内の名所旧跡を整備する動向が見て取れます。それは、文化9年(1812)の院庄旧跡の景観整備と、同13年の佐良山碑の建立です。前者は、貞享5年(1688)に当時の津山藩森家の家老長尾勝明が建てた石碑周辺の樹木が枯れたため、新たに松や桜を数本植え直し、さらには院庄の故事を世に広めるため、児島高德像を描いた刷り物を作成したものです。後者は、古代からの歌枕として知られる久米の佐良山場所を明示するために、嵯峨山の山頂に石碑を建てたものです(それぞれ本ページ・次ページの写真参照)。これらの刷り物や石碑の撰文を担当したのは、小島清介という人物です。本稿では彼の一生に注目し、そこから浮かび上がる疑問点について考えてみます。

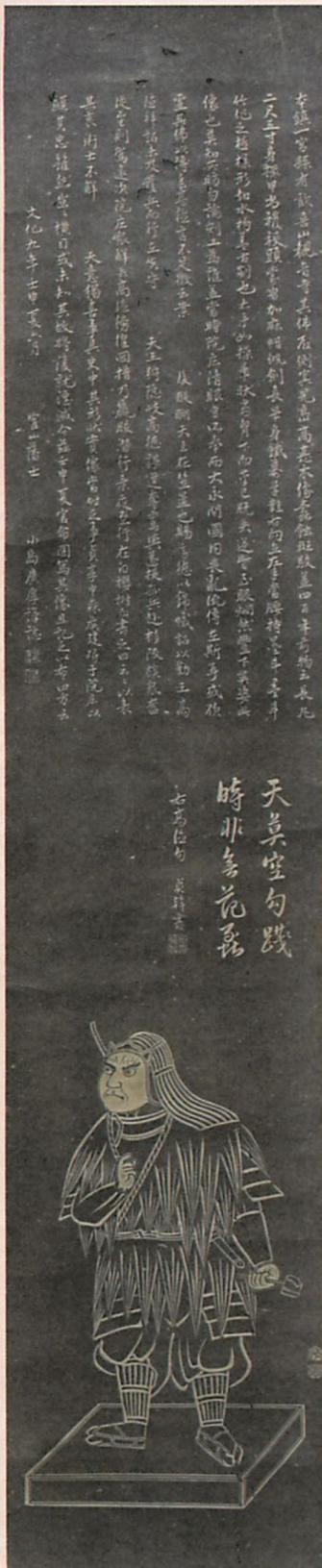
彼は、松平家中で古参の家柄に当たる小島家で天明7年(1787)に生まれました。父は大目付・小姓頭・中奥頭などの要職を歴任した新五右衛門(3代目)です。新五右衛門には長らく実子がなく、縁戚の村山家から養子を迎えていたのですが、事情があつて実家に返さねばならなくなり、まだ幼い清介を跡継ぎとしました。

彼は幼少期から文武に励み、学問や柔術・剣術・槍術への出精をたびたび褒められています。文化6年(1809)、23歳で江戸に出向き、昌平坂学問所で9か月間寄宿修行しました。その後も約1年間、江戸で再び学問修行し、帰国した直後に28歳で町奉行に就任します。4年半務めた後に解任され、文政5年(1822)には「宜しからざる風聞」があることを理由に蟄居を命じら

れ、家は別人が相続することとして清介は「離散勝手次第」を申し渡され、津山を立ち去りました。一時は岡山藩の儒者・万波醒盧の元に身を寄せ、「寓居雜記」という随筆を残しています。その後、病にかかつてから津山への帰郷を許され、文政13年(1830)「1830」10月に44歳でこの世を去りました(以上の略歴は、津山藩士の「勤書」と清介の墓碑銘を参照。彼の諱は広厚、号は天楽で、幼少期の通称は定吉・鉄之助、町奉行在任中に此母と改名しますが、亡くなる前に清介に戻していること、「此母」は歴代の名乗りで彼以外にも名乗つた者がいることから、本稿では清介の通称で統一します)。

和歌を巻子に仕立てたものなどが、当館に最近寄贈されました(次ページの写真参照)。また、津山藩医で蘭学者の箕作阮甫が幼少期に漢籍を学んだ師の一人が、清介であつたと伝えられています(吳秀三著『箕作阮甫』参照)。

従来、小島清介が紹介される場合、その肩書は儒者とされるのがほとんどでした。先に触れた現存の資料も、彼が優れた漢学者・儒者であつたことを裏付けています。しかし、略歴の中で注目すべきなのは、30歳に満たない若年で町奉行に就任していることです。しかも、それ以前に藩内で何らかの実務経験を積んだ様子も見受けられないのです。松平家中の歴代町奉行を押しなべて見れば、長年の勤務を経て老練の域に達した者が町奉行に任命されているのに対し



児島高德像の刷り物
 上段の漢文の撰文：小島清介
 中段の十字詩の書：太田烏山
 下段の画像：広瀬台山

高德像は東一宮村の観音寺(後に廃絶)に伝来の木像を模写したもので、木像は作楽神社創建の際に移し祀られました。



佐良山碑 津山市指定文化財

撰文：小島清介
書：太田烏山

この碑を建てたのは「東作誌」の編者である正木輝雄です。彼は嵯峨山こそが「久米の佐良山」だと考えたのですが、どの山に当たるのか、未だに確定していません。

て、清介の前歴は異色です。彼の学問の素養が高く評価されての抜擢だとは思われますが、異例の人事と言えるでしょう。

清介の町奉行在任期間は、文化11年（1814）5月21日から文政元年（1818）10月3日までで、この間の町奉行日記は、欠けることなく残っています。これを精読すれば異例人事の謎を解く手掛かりが得られるかもしれません。とりあえずこの期間中で津山城下の町政上の大きな出来事を拾い上げると、文化13年の催促役の新設が挙げられます。町の大年寄を勤めた玉置家の「町方以後留」によると、当時流行していた博奕に手を染め、家業を疎かにする者が増えていたことへの対策として、城下の各町に「町内家業催促役」を1名ずつ、その上に惣町の催促役を2名任命し、老人・病人以外で家業に精を出さず浮かれて暮らす者を説得し、商いに掛かるよう仕向けるもので、さらには博奕

の温床になりやすかった煮売屋（飯と煮物を売ったり食べさせたりする店）に株を導入し、従来からの業者者47名に株を与え、新規の営業を禁止しました。

この時の町奉行日記（文化13年4月2日）には「町方諸締新法変革取計」という極めて簡潔な記述と、前月中旬に伺を立てた上で実施したことや詳細は別の書類があるため省略することが注記されるのみで、実施に至る経緯ばかりか、新設した「催促役」の名称さえ記されていません。ただ、3月9日の日記には「市中締り考書、御用番へ差出伺置候」とあり、これも詳細は別帳に記したというのですが、これらの記述から、町方の取締りに関わる改革を町奉行の清介が上司に提案し、許可されたので実行したと読み取れ、この改革に清介が主体的に関わっていたらしいことがうかがえます。藩の上層部が清介に期待していたのは、このような庶民への風紀の指

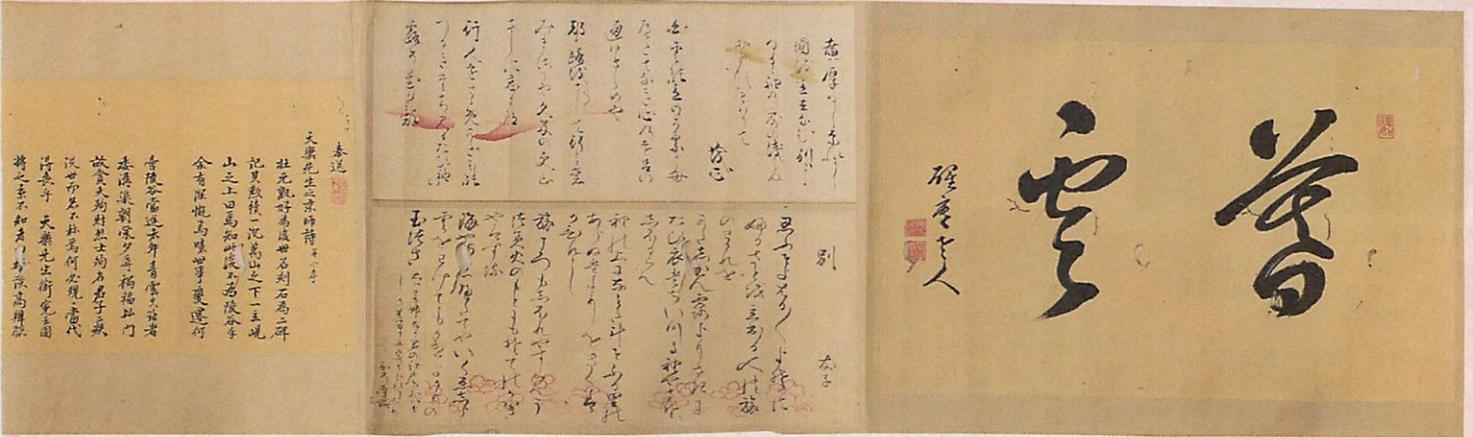
導によって社会秩序の維持・強化を推進する役割だったのかもしれない。実は、清介が町奉行に任命された同じ日に、村方支配の担当者である郡代にも異動があり、新たに郡代となったのは大村成夫で、彼もまた儒者でした。町奉行・郡代という庶民の支配に携わる役職に儒者を任命し、その学識を直接活用することで、目に見える成果を挙げようという意図を読み取ることも可能ではないでしょうか。

異例の抜擢の背景

文政元年（1818）10月に清介が町奉行を解任された時、合わせて3日間「差控」（＝自宅謹慎）の処分も受けました。解任前の町奉行日記を見ると、9月は登城するよう決められている御用日を全て、病気を理由に欠席しており、10月3日の解任の申渡しも郡代の大村を名代に立てて欠席しています。

解任の理由は何だったのでしょうか？それを明記したものは、先述の呉秀三著『箕作阮甫』のみで、「性質耿介であつたので讒を受け」たとあります。つまり、高潔な志を持つているために世俗とは合わない性格だったため、誹謗中傷を受けてしまったというのです。この記述が的確なのだと思えば、実務経験のない若い学者を起用したのですから、あまりにも当然の結果ではないでしょうか。

一方、同時に郡代となった大村は当時48歳で、藩内の各部署で経験を



積み重ねてからの就任でした。その後の松平家の10万石復帰も郡代として迎え、加増地受け取りの実務を大過なく果たしています。おそらく、儒者としての素養という面では、両者の間にそれほど差はなかったと思われませんが、藩という官僚的組織の中での実務経験、さらには言えはる功の有無が、その後の人生を大きく左右することになったと言えます。清介の町奉行解任前の病気は、ひよつとすると精神的なストレスによる鬱病的な症状であったかもしれません。

では、清介のような「実務経験のない若い学者」を町奉行へと強く推したのは誰だったのでしょうか？この問いについては、先の解任理由以上に手掛かりが乏しいのですが、藩主の松平斉孝ではないかと推測します。

彼は天明8年（1788）生まれで清介の一つ年下、家督を相続してまだ9年という27歳の若い藩主でした。名君と評判の高い先々代（父の康哉）・先代（兄の康久）に負けまいと意気込み、理想に燃えて政務に当たっていたとしても不思議ではありません。だとすれば、功を急ぐあまり異例の抜擢をしたのではないかと思うのです。清介は町奉行就任前の1年間、江戸で学問修行していますが、行きも帰りも藩主斉孝の参勤交代の供をしていて、帰国から12日後の町奉行任命でした。幼少期から学問に秀でていた彼のことは、斉孝も当然知っていたでしょうし、この1年間の江戸参勤に同行した同

世代の清介に親近感を抱いていたとも思われます。重臣たちから見れば気長に成長を待つべき「将来のホープ」に、若き藩主は「今すぐ成果を挙げられる人材」だと過度の期待をかけたのではないのでしょうか。

おわりに

近世後期の津山藩の儒者・小島清

介の一生を、特に町奉行就任時に注目しつつ振り返りました。彼が町奉行を務めた時期は、藩主斉孝の治世の前期から中盤に差し掛かるところで、10万石復帰の直前にも当たります。この時期の藩の施策を分析・検討するうえで、当時の藩内主要ポストの動静を明らかにすることも有効かつ重要と考え、その手始めとして彼にスポットを当ててみた次第です。



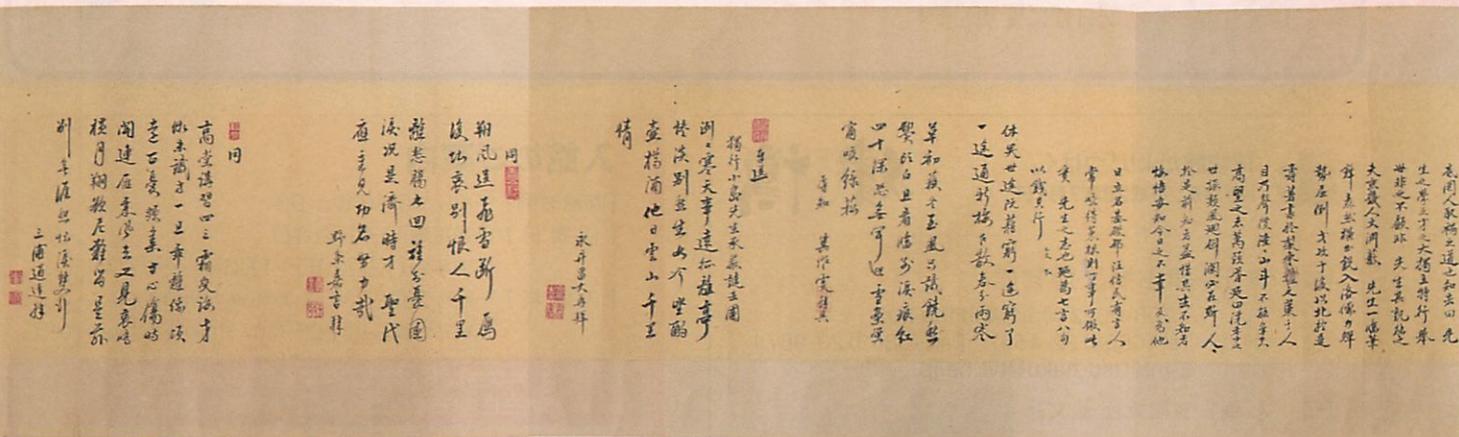
小島清介の墓碑 妙法寺境内
碑銘の撰文：万波醒盧
書：菊池文理



寓居雑記 小島清介筆
岡山県立図書館蔵の謄写版冊子
(原本は所在不明)

醒盧は「明秀好学」「才学可称」と記し、若き秀才の喪失を惜んでいます。奇しくも碑銘の撰・書はともに、清介の弟子・箕作阮甫の縁者です。

内容は、万波家に身を寄せていた時に岡山で見聞した事柄が多く、津山のことはあまり触れられていないようです。



暮雲篇 (巻頭部) 小島清介への送別の書を巻頭に仕立てたもの 万波醒盧の書「暮雲」や箕作阮甫の漢詩が収められています。

秋の特別展のごあんない

「行列を組む武士たち ～津山藩松平家の行列図より～」

会期：10月8日(土)～11月20日(日)



■江戸時代の支配階層である武士たちは、移動や旅の時に行列を組んで進みました。本展では、津山藩松平家の各種の行列図のほか、乗物や熊毛槍など行列に用いた道具類を合せて紹介し、武士の行列を通して江戸時代の社会のありようを概観します。

■今回、現存する松平家の行列図を全て展示しますが、ふすま仕立ての図は全長13mを超えるもので、全てを展示する機会はなかなかありません。この機会にぜひ、その迫力をご体感ください。

【おもな展示資料】

●松平家の行列図

10万石加増後初入国の行列図2種（ふすま仕立ての図／全7面、絵巻図／全3巻）

將軍代替わり時の江戸城登城の図2種（額装図／全6種、絵巻図／全1巻）

平常時の江戸城登城の図（絵巻図／全1巻）

江戸にて火消し出動時の行列図（絵巻図／全3巻）

●行列に用いた道具類

熊毛槍 火消用纏まと（葵紋付） 藩主が用いた乗物

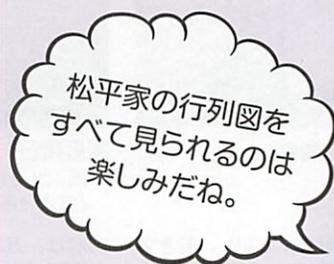
◇関連事業

～第110回文化財めぐり「出雲街道を歩く」

日 程：10月29日(土)

コース：津山城京橋門跡 ～ 大崎駅の出雲街道（約7km）

※注意…前号の行事予定で「10月22日」とご案内しましたが、上記日程に変更します。



博物館キャラクター
おパレ夫



博物館だより「つはく」
No.89 平成28年7月1日

津博
TSUJIBOKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

【印刷】有限会社 弘文社

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00

【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月29日～1月3日)・その他

【入館料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。